

The Effect of “Shoga” in Teaching Japanese Traditional Music in the Workshops of “Inuyama Kodomo Nagauta Club”

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-03-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 寺田, 己保子, 山田, 佳穂 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/163

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



日本の伝統音楽の指導における^{しょうが}唱歌の有効性

—「犬山こども長唄クラブ」の実践から—

The Effect of “Shoga” in Teaching Japanese Traditional Music
in the Workshops of “Inuyama Kodomo Nagauta Club”

寺田 己保子・山田 佳穂

TERADA, Mihoko YAMADA, Kaho

1. 研究の背景と目的

学校教育における日本の伝統音楽については、平成10年及び平成20年に改訂された中学校学習指導要領で和楽器の学習¹⁾について明示されたことにより、その取り組みが数多くみられるようになってきた。平成20年「中央教育審議会答申」にも「国際社会で活躍する日本人の育成を図る上で、我が国や郷土の伝統や文化を受け止め、そのよさを継承・発展させるための教育を充実することが必要である。」と示されており、今後我が国の伝統文化に関する教育の充実が一層求められていくことは明らかである。しかし、現場の教師にとって伝統音楽の指導についてはまだまだ取り組みにくいものであり、教材や指導内容について試行錯誤の状況が続いているように感じられる。

音楽はその国の言語や風土、文化と深く関わり、人々の生活の中から生み出されてきた。そして言語の持つ特性が音楽に直接間接に作用し特有の雰囲気を生み出している。²⁾幼少時のとなえうたやあそびうたは、ことばと音

がゆるやかに結びつきその音感覚や拍感が自然に身体に取り込まれていくものであった。唱歌を唱えることも同じように考えることができる。日本語と節のかかわり、節をことばとして感じる耳が育つことで、もっと楽に日本の音楽のあり方をとらえることができるのではないだろうか。

本稿は、長唄の専門家による幼少期の子どもの稽古の様子から学校教育への示唆が見いだせるという視点での共同研究である。山田が「犬山こども長唄クラブ」の小学校1年生の締太鼓及び3年生の能管の稽古から、子どもたちが初めて聴く唱歌をどのようにとらえ表現するのか、稽古をしている幼少期の子ども姿から見取り、伝統音楽の指導における唱歌の有効性を考察する。そして寺田が本実践が示唆するものと学校教育における日本の伝統音楽の指導のありかたをつなぎ、伝統音楽の学習が何を目標せばよいのかについて考察する。

キーワード：日本の伝統音楽、唱歌、学校教育

Key words : Japanese traditional music, Shoga, school education

2. 実践

2-1 「犬山こども長唄クラブ」について

ある幼稚園保護者の有志による催しで、年中児たちに向けてわずか5分に抜粋された長唄「鞍馬山」の演奏をした。その間の園児たちの様子は非常に興味深いものであった。演奏者が現れ三味線の調弦が始まると静まり返り、演奏中には正座姿の膝に両手をつき、身を乗り出して集中した。園児が長唄を鑑賞するという機会是一般的ではないだろうし、また体験するという機会は非常に少ないと考える。「伝統音楽は難しい」などと敬遠されがちであるが、就学前の子どもたちはともすると遊びの世界で柔軟な受け取り方をするのではないだろうか。就学前の子どもたちにとって遊び、生活、言葉の延長に伝統音楽を感じる力があることを感じ、この催しの1年後に「犬山こども長唄クラブ」を結成した。年長児から長唄、囃子の稽古を積んできた子どもたちは現在4年生で、後輩達と共に活動を続けている。

活動内容・組織

設立	2011年	指導	東音山田卓
会員	19名	小学生	5年生1名 4年生5名 2年生6名 1年生1名
		幼稚園児	6歳児4名 5歳児2名

(2015.8現在)

内容 * 集団稽古 (月 / 2回 30分 / 1回)
長唄15分間
囃子15分間

園児、小学生低学年 (締太鼓) /
小学生高学年 (能管)

* 発表会 年2回程度 (写真①)

運営 文化芸術振興費補助金
(伝統文化親子教室事業)
[文化庁] など

稽古形式

クラブ活動的な集団指導を行い、多くの子どもたちに間口を広げ募集している。クラスは3部に分かれ、経験度合いで曲目を変え稽古している。指導者が唄方奏者であるため稽古の中心は長唄であるが、音楽全体の理解を深めるためにも囃子の稽古を同時に行っている。



写真① 2015.1 発表会 長唄「雛鶴三番叟」

伝統的な長唄の曲目そのままを教材として手ほどきをし、発表会に向けて1年間に1、2曲仕上げている。発表会ではプロの演奏の助演を実現することもこのクラブの特徴である。

*経験した曲（一部抜粋含む）

唄 「供奴」「鞍馬山」「雛鶴三番叟」（三番叟のみ）「外記猿」

締太鼓 「雛鶴三番叟」「小鍛冶」セリの合方など

稽古のすすめ方

唄 省略

締太鼓

譜面の扱い方について

指導者のみ「ツケ」を見る

稽古方法

- ①指導者が唱歌を唱える→指導者と子どもと一緒に唱える。
 - ②指導者が唱歌を唱えながら代用太鼓（写真②）を打つ→指導者と子どもと一緒に代用太鼓を打つ。
 - ③指導者が掛け声のみをかける。→子どもだけ代用太鼓を打つ。
- *打つことに掛け声をかけることを含む。
*未就学児は指導者の打つ手は左右逆手の場



写真② 漫画雑誌に包装を施している

合がある。

*代用太鼓から本物の太鼓の移行は本番直前である。

*バチは貸出する。

能管

譜面の扱いについて

指導者のみ「ツケ」を見る。

稽古方法

- ①指導者が唱歌を唱える。→指導者と子どもと一緒に唱える。
 - ②指導者が能管を吹く。→子どもがまねて能管（写真③）を吹く。
 - ③指導者が唱歌を唱える。→子どもが能管を吹く。
- *事前に能管の音を出すこと、基本的な音の指遣いを練習する。
*能管の唱歌には太鼓の掛け声が含まれている。
*初心者は長時間音を出す苦痛を伴うこともあり、唱歌を唱える時間を毎回必ずとる。
*能管（写真③）は個人持ち

この活動から、日本の子どもにも本来備わる言葉の感覚、音感覚、所作、立居振舞すべて日本人らしい姿を生かした音楽教育の実践を探っている。現代の日本の子どもを取り巻く



写真③ (有)日音のプラスチック製能管

環境から、「本来備わる日本人らしさ」という万人の共通点を見つけることは難しいことなのかもしれない。しかし日本語を共通語としている以上日本人としてある共通する文化の特徴があるはずである。幼稚園での集団生活に「正座をする」習慣があったわけではない子どもたちが、初めて聴く長唄に思わず正座をして聴き入った、という行動は単なる偶然であろうか。伝統音楽は子どもの身体を伴う遊びと言葉の感覚に大きく響き刺激しうる力強さがある。この点に注目することで日本人らしい姿を生かす音楽教育の糸口がみつかるのではないかと考えている。

2-2 唱歌の有効性について

指導者が長唄の唄方奏者であるため稽古の中心は「唄」にあるが、音楽全体の理解に「囃子」は欠かせないため同時に稽古を行っている。

本稿では囃子の伝統的指導としての「唱歌」に焦点をあてその有効性について考察する。伝統的な唱歌には日本語特有の言葉の響き、ごろの良さが備わっており唱えること自体楽しさを感じる人が多い。日本語を日常的に話す日本人には記憶もたやすく、親しみの持てる唱歌を扱うことは日本人らしい表現教育ではないかと考える。

実践①では締太鼓の指導に唱歌がどのように有効であるかを探る。二本のバチを持ち太鼓の中心を打つというシンプルな行為はだれもが快く感じるもので、締太鼓は幼児にとって親しみやすい楽器である。音を出すことが単純な構造のため一見たやすい楽器と思われがちであるが、奏者の身体から表現される音と空間には長唄のなかでも指揮者に位置付けられるほどの役割を担っている。このように

音楽の中枢に値する締太鼓の伝承、指導に唱歌を用いてきたという先人達には必ず理由があるはずである。実践からその理由に迫りたい。

実践②では能管の指導に唱歌がどのように有効であるかを探る。能管は笛でありながら音楽のなかでの役割は旋律を担う楽器ではなく、打楽器のような役割を担い音楽に表情をつける楽器である。また擬音笛とも例えられることから古来より日本人は「自然の音」と感じてきた。一管ごとに異なるピッチと音色を持つ能管の性質上からも理解できるが、日本人の感性は音楽に自然界の雑音を求めた。そのため旋律や奏法を書き示す譜面ではなく、言葉に置き換え唱歌として残すことに便利さを感じたと考えられる。能管の奏者にとっては指導に限らず、口で表現する場合すべて唱歌である。唱歌以外には表現ができないと考えられる。締太鼓以上に言葉と結びついている能管の唱歌であるが、実践によって如何に演奏に作用するものであるのかを探る。

実践① 締太鼓の指導における唱歌の有効性手組*「くせ」～長唄「雛鶴三番叟」（参考譜例A）より

クラブ経験2年目のメンバーの小学1年生であるが、長唄をまるごと一曲体験することは初めてである。同時に唄の稽古で長唄「雛鶴三番叟」の同じ部分を取り上げていたために曲の関心もあり理解も早い。

計10回の稽古はすべて三味線、唄と合わせて行うものである。ただ「くせ」は能管の唱歌を唱えながら打つという手法で他とは異なる稽古で初体験である。全体の稽古を通してみた場合、Dのような締太鼓の手が複雑なところ、Fのような

三味線や唄のきっかけをつかむところに時間をかけて稽古をしている。「くせ」「地」の部分に関しては苦勞する姿は見られなかった。今回は4回目稽古から考察する。

1回目	Aの導入
2回目	Aの復習、BCの導入
3回目	A～Cの復習、Dの導入
4回目	A～Dの復習、「くせ」の導入
5回目	A～くせの復習、「地」EFの導入
6回目	「くせ」～Fの復習、Gの導入
7回目	F～Gの復習
8回目	A～Fの復習 Dを丁寧に渡う
9回目	A～Fの復習 Fを丁寧に渡う
10回目	A～Fの反復稽古

* 「くせ」と呼ばれる手組について

能の謡曲の中で用いられる手組から由来する名で、三味線音楽に合わせた歌舞伎囃子として用いられる手組の1つ。

曲者、面白いもの、変わったものという意味合いであることから、この手組のもつ音の響きに当時特異な面白さを感じていたことが伺われる。

[教材とした主な理由]

手ほどきとして用いられ、数多くの曲に用いられる。／教材として適度な長さである。／ごろが良く、覚えやすい。／長唄「雛鶴三番叟」を唄で経験している。／能管の唱歌を

唱えながら打つという伝統的な稽古法が音楽の全体的な理解を促す。

稽古方法

「くせ」の唱歌を覚え、唱えながら締太鼓の手を加える。練習の間は常に唱歌を唱えながら打つことを繰り返す。最後に三味線・唄に合わせて締太鼓を打つ。

観察する点

- 唱歌を聴いたときどのように受け止め、模倣をするのか。
- 唱歌に合わせて締太鼓を打つときはどのような様子か。
- 子どもたちの締太鼓の音はいかなる音楽を表現するか。

分析及び考察

- 「ギャグみたい」と連発する様子が見られた。日常使い慣れた自国の言葉の感覚があるからこそ、日本語のごろの良さを面白いと感じ取ることができたと考える。唱歌は言葉遊びに近いものとして感じている例とみることができる。
- 締太鼓は掛け声と共に演奏されるもので

囃子の譜面は「ツケ」と呼ばれ本来稽古を受けた者の覚え書きとして存在し、西洋音楽の楽譜の役割と異なる。この「ツケ」は締太鼓の奏者のものだが、唄の歌詞、三味線・能管の唱歌などもあらゆるきっかけになる部分が書かれており音楽全体を聴きながら演奏していることが伺われる。

譜例A 堅田喜四郎遺稿集よ「雛鶴三番叟」、「くせ」

4 回目の稽古記録

場面	時間	指導者の発話、身振りを含めた動作	子どもの発話、表情、身振りを含めた動作
A～C D	3分 5分	①掛け声に注意しながら復習 ②3か所にかけて複雑な手を丁寧に指導。	①掛け声だけの練習の後には良く揃う。 ②細かく分けて打つことにより理解しながら打つ。ほぼ揃っている。
「くせ」	5分	①能管の唱歌をつけて「くせ」の部分を見て見せる。 ②「くせ」という名称を説明。太鼓なしでみんな一緒に唱歌だけ真似してみよう。3回 ③これは笛の唱歌であることを説明してゆっくり打って見せる。2回 ④一緒に打ってみよう。ゆっくり、唱歌もできる子は言いながらやってみよう。 ⑤くせの「ハイトロ～オハイハイトロ」まではチュウパチとってあまりパチを上げないことを注意する。軽めに打つことを示す。 ⑥くせの最後「テレックッ天天」の練習。よくでてるから覚えてしまおうよ。「ッ天天」はさっき出てきたのと同じように。 ⑦「ハヲ」の掛け声をくわえて「くせ」を通して打ってみよう。	①一緒についてこないで興味深そうにみている。終わったら子ども達の顔が自然にほころび嬉しそう。「なんかギャグみたい」とS君が連発して言う。 ②1回だけでは覚えられない様子だが2回以降は調子良く唄える。唄ったあとも調子の良い感じに笑い声。 ③ばらばらに真似している様子。最後の部分だけでできて「できた」と満足する声も上がる。 ④全員集中して打っている。「できた」と口ぐちに言っていて嬉しそう。 ⑤真似しているが注意点にはあまり関心がない様子。ただこの部分の細かい説明はなく唱歌に合わせることのみの指示でありながら不思議と打っている。 ⑥「ッ天天」の復習であることは理解できていて動きが揃う。 ⑦ほぼ真似ている。集中力がなくなっている。
A～「くせ」	2分	①三味線のにせて最初から通してみる。間違えてもいいからここまでの繋がりを確認しようね。「くせ」はごろがいいから覚えやすいね。	①Dの部分も良く覚えていて最後まで全員ついてくることができる。「できた」と歓声を上げる。(写真④)



写真④

ある。掛け声は音楽の一部であり、バチの動きに自然に沿ったものであるが、間を作ることに慣れない初心者にとって声に出すことが難しい箇所も多い。そのため子ども達にしっかり声を出すことを目的とした掛け声だけの練習をすることがある。その練習後、掛け声をかけながら打つ通常の練習に戻すと、掛け声と一緒に唱歌までしっかり声に出して唱えるという様子が見られる。声を出す訓練により身体にある唱歌が表出したことで、唱歌が締太鼓を打つ動作としっかりリンクされているという結果をもたらしている。声に出す必要のない唱歌の部分まで唱えてしまう、またその逆に唱歌を模倣する稽古の際バチの動きを付け始めるなどの子どもの様子も見られる。

- c. 唱歌と共に打つ音には静的な日本の音といえるはずみのない音が自然に出ており、バチのさばきに対しての指導は必要とできなかった。たとえば「ヒヤイトロ」の「トロ」

でバチが太鼓に落ちるといふ重みのある動きが唱歌の言葉に似ていた点、また「オハイ」という部分では立ち上がるような唱歌の言葉に合うようなバチの勢いが感じられた。唱歌とともになめらかに太鼓の音が動きをもたらした様子が見られる。唱歌を唱える要領で音に表情を自然につけている。

実践② 3年生 能管の稽古を通して
長唄「小鍛冶」セリの合方（参考 譜例B）より

締太鼓の稽古を経験したクラブ4年目の小学3年生のメンバーである。能管が楽器として初めて個人持ちとなるため更に稽古に対する関心も高まる。この題材は2年前に締太鼓で体験済の馴染みのある曲である。計8回の稽古を振り返ると、唱歌を唱えることが半分以上の稽古であった。唱歌だけを繰り返して全てを覚えることは難しいが三味線が入ると調子良く暗唱ができるようになる。稽古時

1回目	A B	唱歌	音を出す練習	6回目	A~G	唱歌	ヒシギの出し方
2回目	A B	唱歌	音を出す練習	7回目	A~G	唱歌	A~Cの吹き方
3回目	A~G	唱歌	音を出す練習	8回目	A~G	唱歌	A~Cの吹き方
4回目	A~G	唱歌	音を出す練習	9回目	A~G	唱歌	A~Eの吹き方
5回目	A~G	唱歌	ヒシギの出し方	10回目	A~G	唱歌	A~Gの吹き方

譜例B 笛方福原寛氏 直筆「ツケ」より

1 回目の稽古記録

場面	時間	指導者の発話、身振りを含めた動作	子どもの発話、表情、身振りを含めた動作
A～C 唱歌	10分	<p>①まず楽器を持たないで唱歌を聴いて真似してね。 太鼓の「イヤー テ天」の後に「ヒヤイトロ ヒヤリヒヤリヒヤリ」と吹くので一緒に唱歌を言ってみよう。 ・Aを2回まわり一緒に唱える。 ・Bに続き唱える。 ・繰り返しなどの説明をして一緒に唱える。先生ははっきり間をとって分かりやすく唱える。 ・「ッ」は休みの部分と説明。もう一度唱える。 ・もう一度唱える。 最後の「ヒーイ」をしっかり2拍に感じられるようにその部分だけ練習。</p> <p>②この唱歌の通り吹けば出来上がり。能管でABを吹いて聴かせる。</p> <p>・言葉を覚えてしまえば後は指が動くだけだね。</p> <p>③能管の説明。 「この笛は少し違っていて 音を出すのと特に違うよ。」 音を下から順に出し「この笛はドレミが吹けない音痴の笛だよ」「だから言葉で覚えるんだよ」</p> <p>④吹き方の説明、アドバイス 「唇の下にあてて息をまっすぐに出すように」「体がまっすぐ笛が傾かないで」「唇が穴にあたる感覚を覚えて」「疲れると腕が左側に戻ってくるよ」「息を中に入れてようとしないで歌口の上を滑らすイメージで」「ホースの水が出る理屈と同じで息の出る穴を小さくすると勢いが出て音になるよ」</p>	<p>①Y君は楽器が気になっているが、「ヒヤイトロ」の響きが面白いのかふざけて真似ている。</p> <p>・先生の「フヤ」などの掛け声に合わせて調子よく唱えている。 ・「長い～」 ・少し不思議な印象があるのか長唄のときのような声が出ない。先生の声はほぼ唄と同じくらいははっきりしている。 ・もぞもぞうごきながら唱える。</p> <p>・「ヒー」が面白くて何度もふざけて言う。 唱歌に少し飽きてきた様子。</p> <p>②「どういうこと？」と能管の歌口にあて唱歌を唱えたりふざけながら不思議な様子。 先生の能管を聴いている時、確かに聴こえることが興味深く、嬉しそうな表情を見せる。 終わった時「すばらしい」「確かに」「こんなに音が高かったんだ」と口ぐちに言う。</p> <p>・でも音をどうやってだしたらいいかわからない。</p> <p>③能管が気になって息をふきこんでいる。</p>
音の出し方 指導	5分	<p>④一生懸命吹こうとしている。 「上手くないか」と言い質問をする。</p> <p>Y君苦戦。唇が下にまきこんだようになり息を笛に入れようとくわえた格好になっている。</p>	

間がわずか10分になることも多く音を出す練習はほとんどできなかったが、一人の子どもが突出して上手になったことで他の子どもたちが影響を受けていき全員がヒシギの音を何とか出すところまで至った。今回は1回目では唱歌の体験、8回目では唱歌による演奏を考察する。

稽古方法

楽器指導の導入には音を出すことを最優先にせず唱歌を暗唱させることに努める。横笛の経験がなく能管を吹くときは音をしっかりと出すまでに時間がかかり、音が出始めても毎回唱歌の暗唱を行う。

観察する点

- a. 唱歌の体験後、楽器の音をどのように感じているか。
- b. 唱歌を唱えることで何を感じとらせているか。

分析及び考察

- a. 長い唱歌の練習の後に聴いた先生の能管の音を「確かに」とつぶやく場面があった。唱歌が笛の音にぴったり合っていることに子供が反応し、集中する所である。言葉で唱えていたことが楽器の音になる意外性を感じ、唱えていた言葉に笛の音が似ていることを次第に認識していき驚く様子を観察できる。
- b. 唱歌をとなえた後、「ヒヤイトロ」と歌口の部分に口をつけて唱えている姿が見られた。先生の「唱歌の通り吹けば出来上がり」

という言葉に反応した行動である。楽器にしゃべらせるということ子供らしく単純に受け取った何気ない行動ではあるものの、そこには音楽の指導において大変高度なレベルの指導を自然に行ったことがいえる。楽器に歌わせる、しゃべらせるという音楽の表現は、最低条件でありながらも技巧的な問題を重視するなど、その指導は後回しにされることが多い。しかし、唱歌の模倣を繰り返すのみの指導により、それを特別な説明もなしに子供に感じ取らせることができる。

稽古方法

唱歌をA～Gまで唱える。そのあとにABを能管で吹く。

8回目の稽古記録

場面	時間	指導者の発話、身振りを含めた動作	子どもの発話、表情、身振りを含めた動作
笛の比較を問う	3分	能管ってリコーダーと違う？	「音階が違う」「ドレミがない」「能管で出す音はリコーダーではダメな音」「楽譜がそもそも違う」「五線の音符じゃなくて数字で表す」など口ぐちに言う。全く違うということをそれぞれ感じ、自分の言葉で表現したがっている様子。
小鍛冶セリの合方 A	5分	①・まずヒシギだけ吹いてみよう。 ・「ヒーイ」としっかり最後まで吹こう。 ②A「ヒヤイトロ～ヒーイ」まで唱歌を唱える。 ③疲れたから唱歌を一緒に唱えるよ。三味線を弾きながら唱える。	①・Aちゃん指遣い忘れていたが他はそれぞれ音を出す。 ・「ヒーイ」を丁寧に全員で吹く。 ②息継ぎのため途切れて「ヒヤイトロ」となっているがゆっくり丁寧に吹き込んでいる。一回通しただけで疲れる。 ③しっかり唱えているが三味線と一緒に音高差がつき節のようになる。K君が「ヒーイ」のところで、先生のように膝を2回打つ。しっかり2つの拍を感じている様子。
AB	2分	①三味線を弾きながら唱える。	①Bのところはまだはっきりしていない所もあるがつけられながら唱える。
A	2分	①では最後に1回吹くよ。構え方を指導してから三味線を弾く。	①少し改まった気持ちで吹こうとしている。全ての音が全員吹けていないとは思いますが、最後まであきらめる様子もなく吹く。初めて通して吹けたので嬉しそう。(写真⑤)



写真⑤

観察する点

- c. 音はどのように表現されているか。
- d. 音は出ているか。

分析及び考察

- c. 唱歌をしゃべるといふ表現が、つたないながらに感じられる演奏である。息が効率よく能管の音にならないため息継ぎも多いが、「ヒヤイ」といふ言葉のつながりの部分では息継ぎは不自然と感じるようて唱歌を似せる工夫が見られた。またヒシギの音は、唱歌の練習の時に繰り返したように「ヒーイ」の「イ」までしっかり表現されていた。
- d. 全員がすべての音をしっかりと出せていない様子で、息が十分に音にならず漏れていた。だが全員で演奏すれば音楽の大きな流れは切れることもなく、唱歌の表現がしっかりできている。全員で一緒に音を出すと自分の音がどの程度出ているか判別できないためか、十分に音が出ていなくても「できた」といふ満足感が見られる。一見子どもらしい無邪気な様子と見受けられるが、それは唱歌の体感からくる反応とも見ることができ。音楽そのものを表現する唱歌の場合、身体に感じる音楽の度合が唱歌を伴わない音楽に比べて多いことを意味する結果だと考えられる。唱歌を唱える感覚は、

「息を出すタイミング」「息の圧力などの奏法の感覚に非常に似ている。この類似点をもたらしたことが関係すると言える。

2-3 考察

音楽そのものを表現する唱歌を指導者が唱えることで音楽の全体を感じとり、模倣を繰り返すことで体に取り込む。その後「唱歌を唱えるように楽器を奏し、表現する」といふ指導を行った。唱歌を用いる伝統的な指導を通して、子どもたちはどのような演奏をして、子どもの中に何が芽生えたかを積極的に捉え分析する。

まず唱歌を子どもは早口言葉のように楽しみながら覚え、ごろの良い部分を鋭い遊びの感覚で見つけ習得していく様子が見られた。すなわち、笑いや洒落のセンスは古典のものでも子どもたちに充分理解できる能力が備わっていることを感じる。日本語の延長線に唱歌を感じ、唱歌の延長線に日本音楽を感じる。つまり「日本語のように音楽を表現すること」「日本の伝統音楽を日本語として聴く耳が育つこと」が唱歌からなる指導の結果である。

流暢に話す言葉の音楽であれば簡単に理解できることが、言葉の感覚を持たない音楽の理解となれば自然には習得できない。知識や

訓練で補い理解できることも当然あるわけだが、演奏上で自然に表現することを考慮した場合、自国の音楽に比べ乗り越えねばならないハードルが非常に多い。しかし唱歌は日本語以外に代用できない表現法であるため、言葉の感覚が直接音楽に活かすことができ、またこのことは西洋の音楽との混同を防ぐことに繋がる。

幼少期の唱歌からなる伝統音楽の体験は継承にとどまらず、音楽と言葉の密接な関係を自然に習得することにある。さらに世界の未体験の音楽に触れる際、その音楽がもつ言葉的な感覚を捉え理解を深めることに繋ぐことができると思う。まだ楽器の演奏が乏しい子どもであっても、唱歌の体験によって目標とする高度なレベルの音楽を体感する。これは、最初から音楽を丸ごと体験する、無駄のない優れた指導法であると確信している。(文責：山田)

3. 本実践から学ぶもの

学校教育における日本の伝統音楽の指導について唱歌を取り上げた実践例や先行研究³⁾はこれまでもいくつか散見されるが、教師が唱歌を音楽そのものとしてとらえているか、またそのような認識が重要であることについては言及されていない。

伝統的な音楽における日本の楽譜の役割と特徴について、薦田⁴⁾は「日本では、音楽作品の規範は楽譜ではなく、師匠の演奏そのものにあると考えている。その意味では日本の楽譜が演奏に与える拘束力は、西洋音楽の場合ほど強くなく、口頭伝承の役割が大きい。」として、器楽を伝える場面では「唱歌（口唱歌とも）」とあって、楽器の音の口真似がよく使われる。と述べている。そして唱歌譜を口

で唱えられる楽譜とも言い換えており、「唱歌は、演奏者がある程度その音楽様式を身につけていれば、旋律やリズムだけでなく、奏法や装飾音、息遣い、強弱などさまざまな情報を伝えることができる。伝承の場で楽器を手にする前に唱歌を徹底的に学ばせる種目も少なくない。」と解説している。

唱歌は日本語の音韻によるものであり、2の実践で山田が観察・分析しているように、子どもは唱歌のごろのよさを面白いと感じて、言葉遊びのようにとらえ習得している。唱歌だけ模倣する場面でも、太鼓を打つ動作が自然につながっているのである。このようなとらえや表現がでてきたのは、指導者が唱歌を音楽そのものとして表現しており、指導者の声の調子や動作など、にじみ出てくるものすべてをそのまま子どもが自分の身体に取り込むという体験の質がもたらしたものと考える。では、はたしてこのような指導は専門家でなければできないことなのだろうか。「伝承の場で楽器を手にする前に唱歌を徹底的に学ばせる」例として、雅楽のそれぞれの楽器の伝承など専門的な音楽のほかにも、地域の祭囃子や郷土芸能でも指導者が笛や太鼓の唱歌を通して子どもや若者に伝えることが知られている。伝承されてきたそれぞれの楽器の唱歌はそれぞれの音楽そのものを表しているものであり、それでしか伝えられないものとして唱歌が位置づいていると考える。学校教育においても、教師が唱歌について、唱歌は、楽器の音色、奏法だけでなく音程、節、速さ、間、掛け声など総合的に含まれている音楽そのものであることを踏まえ、唱歌をしっかりと唱えることが日本の音楽を体験することになるということを理解していれば十分に指導できるものと考えられる。なにより、唱歌は日本語の音

韻であり教師自身が自然体でできるもののはずである。

授業形態の視点から

伝統的な稽古の方法は、師匠と弟子の一对一で行われるが、2の実践ではごくふつうの子どもたちが小集団で稽古を受けている。これをごく小規模クラスの授業と置き換えると、通常の授業形態で取り組むことが可能であるといえる。また、稽古時間は締太鼓も能管もそれぞれにつき1回15分と、年少の子どもの集中力が続く範囲で無理なく行われている。このことから、授業時数の限られた学校現場でも十分に取り組めることがわかる。

教材の視点から

2の実践では伝統的な長唄作品そのものを取り上げている。締太鼓の手組「くせ」は伝統的な型であり、能管の「セリの合方」もよく手ほどきとして用いられるもので長さも適度である。また子どもたちは「くせ」の稽古の前に長唄「雛鶴三番叟」の唄を経験しており、「セリの合方」の稽古の前には同一作品で締太鼓を経験している。長唄は、唄、三味線、囃子の総体がひとつの音楽を形成するものであるため、一つの作品の複数のパートを体験することは、音楽全体の在り方を理解するのに有効である。このことについては寺田⁵⁾のこれまでの実践からも述べるができる。教材について山田⁶⁾は、日本の伝統音楽の場合は特に、その固有性をはっきり認識して指導に当たらなければならないとして、文化の様式が凝縮したような楽曲を選ぶことが先決であると主張している。これまでによく聞かれた「さくら」の次に何をすればよいかという教材についての現場の戸惑いが今でもある

のではないかとと思われるが、2の子どもの姿が求める方向性を示していると考える。

4. 考 察

2の実践①で、子どもが掛け声と一緒に唱歌をしっかりと唱えながら締太鼓を打つ様子や、実践②で唱歌を唱えた後、能管の歌口の部分に口をつけて「ヒヤイトロ」と唱えている姿は、「楽器にしゃべらせる」「唱歌の通り吹けばできあがり」という指導者の言葉に素直に反応した子どもらしい自然な姿であろう。寺田のこれまでの授業実践においても、高校生も大学生も唱歌を唱えた後でその楽器の演奏を聴かせると「本当にそう聞こえる」と目を輝かせ、面白そうに唱えながら動作する姿がよく見られた。唱歌を唱えることで日本の音楽を聴く耳が開かれ、聴き方がわかるようになっていくのである。そしてそれは歌舞伎の鑑賞など日本の伝統芸能を理解することにもつながるものと考えられる。日本の風土、文化、日本語の持つ特性が音楽に作用し特有の味わいを生み出していることから、特に言語形成期の幼少期に日本語の音韻や語感に対する感性を育てることは重要であり、日本の音楽の理解にもつながっていくものと考えられる。寺田の実践で、高校生は長唄の唄と三味線の唱歌を合わせて「あっていないようであっている。」と捉え、唄、三味線、囃子の総体を「指揮者のいない音楽」のあり方として、ドレミによる音楽のあり方とは異なるものであることをしっかりとらえていた。日本の伝統音楽のよさや価値に気づくことは、他の異なる様式の音楽をも受容し理解しようとする態度を育てることにつながる。

生活も洋式化し、日常生活の中で地域の音楽や伝統行事に触れる機会も少なくなってい

る現在であるが、子どもたちに内在しているであろう日本的な感性を目覚めさせ、引き出すためにも、学校教育の中で伝統音楽を取り上げ体験させたい。

デューイはその著の中で「重要なことは、もたれる経験の「質」にかかっている。」として「質的経験を整えることこそ、教育者に課せられた仕事なのである。」と述べている。

唱歌は日本の音楽そのものにつながり、唱歌をしっかりと唱えることが日本の音楽を体験することにつながるということの認識の重要性を主張し、伝統音楽の学習の目指す方向性についての考察としたい。(文責：寺田)

注

- 1) 中学校学習指導要領音楽(平成10年)第3指導計画の作成と内容の取扱い2(4)に「和楽器については、3学年間を通じて1種類以上の楽器を用いること」(抜粋)と示された。平成20年度改定中学校学習指導要領音楽でも同様に、指導計画の作成と内容の取扱いにおいて「和楽器の指導については、3学年間を通じて1種類以上の楽器の表現活動を通して、生徒が我が国や郷土の伝統音楽のよさを味わうことができるよう工夫すること。」(抜粋)と示されている。また平成20年度改定小学校学習指導要領音楽では、第3指導計画の作成と内容の取扱い2(4)アに「各学年で取り上げる打楽器は、木琴、鉄琴、和楽器、諸外国に伝わる様々な楽器を含めて、演奏の効果、学校や指導の実態を考慮して選択すること。」(抜粋)と示された。
- 2) 中学校学習指導要領解説音楽編 教育芸術社 2008
- 3) 猶原和子「江戸囃子を身体まるごと楽しむ：唱歌(しょうが)から出発する伝統音楽の授業」特集学校現場での日本伝統音楽の指導 音楽文化の創造65(2012)、山本宏子「唱歌と太鼓で合奏す

る雅楽の越天楽：本物に近づけるために」日本学校音楽教育実践学会紀要18(2014)、渡邊真一郎「日本伝統音楽学習における身体表現と器楽表現の関わり」日本学校音楽教育実践学会口頭発表(2015)等

- 4) 薦田治子「第2章(3)音楽を記すこと」『日本の伝統音楽を伝える価値—教育現場と日本音楽—』p.38, p.41 京都市立芸術大学 日本伝統音楽研究センター2008
- 5) 寺田己保子「高等学校における日本音楽の特質を踏まえた指導法についての研究～長唄の実践を通して～」2004東京学芸大学修士論文
- 6) 山田隆「呼吸が合うよ！日本の音 表現教材として邦楽を生かす」教育音楽1988.6～1990.5連載 音楽之友社

参考文献

- ・久保田敏子・藤田隆則編『日本の伝統音楽を伝える価値—教育現場と日本音楽—』京都市立芸術大学 日本伝統音楽研究センター 2008
- ・ジョン・デューイ『経験と教育』市村尚久訳 講談社学術文庫2004